

連載小説 1

花嫁

大福御殿

青山七恵

麻紀は大恐慌に陥った。大好きな兄が、日曜日に婚約者を連れてくるというのだ。もう、仲良し家族ではいられなくなる。なによりベツドで一緒に寝られなくなる……。

うちの兄さんが今度、お嫁さんをもらう。

人になりたいしてもらおうというのもつくづくおかしい方だけど、お嫁さんはもらうというのがいちばんしっくりくる。プレゼントみたいに賞状みたいにお菓みに、男の人はお嫁さんをもらう。あたしは彼らがうらやましい。女のあたしはお嫁さんをももらえない。お嫁さんになるほうだ。きつとあと何年かしたら、誰かのお嫁さんになってもらわれていくのだ。それはあんまりいい気はしない。あたしは誰にももらわれたくない。人はもらったたりもらわれたりするものじゃない。でも来年の誕生日、白いほわほわの布で包まれた優しくてかわいいお嫁さんを誰かが用意してくれたなら、あたしは狂喜乱舞して、二十一歳の一年間を世界中に無視されたっておおかたがまんできるだろう。ところがうちの兄さんは、誕生日でもないくせに、今度お嫁さんをももらうと言う。

気に入らない。やめてもらいたい。あたしは兄さんの結婚には反対。

でもわかっている。あたしの意見なんて誰も聞かない。それに言ってみたって、結婚のさしさわりには、たぶんならない。妹が反対するから結婚をやめるなんて聞いたことがない。あたしは、楽しくて無駄なことは大好きだ。でも、つまらなくて無駄なことはしたくない。たんすの裏の掃除とか、デートで釣り堀に行くのとか。

それにしても、兄さんのお嫁さんになる人は、いったいどんな人なんだろう。あの人と一生共に過ごす覚悟を決めるなんて、気がしれない。だつてうちの兄さんはときどき変なおいを見せているし、歯磨きはんまりしないし、お風呂をさぼる。それなのにへんなところで自意識過剰で、天

然パーマの髪の良い具合にふわっと色白の童顔にかぶさるよう、毎朝二十分は洗面所を独占して。その甲斐あって、会社の人からは繊細で純朴な若松君として勝手にかわいがられてるみたいだけど、兄さんという人は、実のところは見栄っぱりで臆病な人間なのだ。性欲だつて人一倍強いのだ。

でも兄さんは、自分がロマンチックで気の優しい女の心をひっぱる顔と性格だつていうことを、昔からよくわかってる。兄さんにとつて、そういう女の人に愛されることはたやすい。

あたしはそういう種類の女じゃない。

でもそんなあたしが兄さんを愛しているのも本当だ。

まだ、お嫁さんになる人には会ってない。おそらくパパもママも会ってない。

おそらく、というのは、なんだかこの結婚に関して、あたしは一人だけ蚊帳の外かやにいるようなさびしい感じを味わっているから。そもそも兄さんが交際相手をうちに連れてこないなんて、初めてのことなのだ。でももしかしたら、内緒にしているだけで、パパとママは共謀してすごく有能な素行調査員をやとつて、その人のことをもうみっちり知りつくしているのかもしれない。もしくはその人のほうでも、ふつうのお客さんにまじつてこっそりお店にお菓子を買いにきて、あたしたちをばっちり観察していたかもしれない。

お店というのは、うちのパパが開いたお店。

パパは和菓子職人をしている。パパのママは銀行員で、パパのママは書道教師だったけど、パパ